早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

生と死の技法
―タイ・プラバートナンプ寺のエスノグラフィー―

The Art of Life and Death:
Ethnography of Buddhist Temple
Wat Phra Baat Nham Phu, Thailand

2022 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
鈴木　勝己
SUZUKI, Katsumi

生と死の技法
タイ・プラバートナンプ寺のエスノグラフィー

鈴木　勝己（SUZUKI, Katsumi）　紹介：辻内　琢也

序章

本研究はエイズホスピスを兼ねるタイ仏教寺院の人びとの暮らしを考察の対象とした。エイズとともに生きる療養者は、過酷な生活の一方で笑顔が目立っていた。本研究では、この笑顔の意味を探りながら療養者の死と死にゆく過程の論考を進めた。療養者の生と死は、同等に理解する必要があった。

第１章　生と死に向きあう枠組み

本章第 1 節では、デス･スタディーズとして分類される学問的営みが、心理学や社会学研究への発展、ベトナム戦争の影響、ホスピス運動と安楽死、「死後の世界」への関心、生物学的死とは異なる「社会的死」にどのように向きあい、展開してきたかを確認した。

第 2 節は、死とエイズの人類学研究のまとめである。死は生物学的要素だけでは完結せず、社会・文化的な要因がある。1980 年代以降、エイズ禍は人類学研究を促進させ、疫学研究へ貢献する初期の人類学研究から、エイズの文化研究という機能主義人類学研究、政治経済学的格差を扱う構造人類学研究として発展し、今日ではそれぞれ折衷的なアプローチが登場している。

第 3 節では、文化ケア概念を問い直すために、ケア論についてまとめた。文化ケアの課題は自省の欠如であった。そのため、相互作用を扱うケアリング概念に着目し、ケアの関係性は現場における自省により、それぞれの情動を扱うことが重要であることを示した。

第 4 節では人類学研究の方法論、フィールドワークを問い直している。本研究では「倫理的証人」である調査者を含めて、人びとがどのように生き直し、どのように死にゆくのか、できるかぎり当事者に近い立場から描き出す「現場主義」を重視した。

第２章　プラバートナンプ寺の暮らし

本章の第 1 節では、寺院概要を説明した。1992 年、住職アロンコット師は、エイズに苦しむ人びとを対象とする救済プロジェクトを開始し、開発僧（かいほつそう）として社会参画した。寺院はエイズに苦しむ人、ケアする人が集い、互いに助けあいながら暮らす福祉施設になっている。

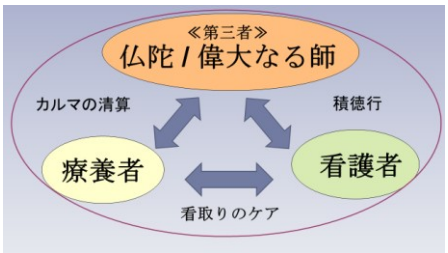
寺院で暮らす人びとの生のあり方は、感染予防を啓蒙していく歌謡ショーにおいて理解できる。療養者はダンサーとしてショーを行い、寺院訪問者にエイズの実態を理解してもらう機会を創出している。寺院療養者は、出身の地域社会で差別されたり排除されたりする経験を重ねており、歌謡ショーは療養者の生き直しの実践でもあった。

死のあり方は、重症病棟ワライラックにおける看取りから理解できる。ケアの実践は療養者の生と死のあり方を方向づけており、臨死期の療養者は原則的に何もせずに見守られる。筆者はこれを「何もしないケア」として考察してきた。同時に看取る側の悩みや逡巡にも着目し、看取りをめぐる多声性、看護の対立に関する語りのデータを提示した。

第３章　仏教を使いこなす

本章第 1 節では、仏教看護が実践されていく社会的背景に言及した。仏教看護は寺院という「場」と結びついた人びとの情動につき動かされて実践されており、技術論だけではなく、エイズという病気の意味づけに着目する必要があった。在家信者の仏教実践、パトロン･クライエント関係を捉えることで仏教看護の可能性を探査した。

第 2 節では、仏教看護の実践「何もしないケア」を掘り下げて分析した。「何もしないケア」は、看取りの「場」における儀礼的な手続きに基づいて実施されていた。その関係性は仏陀を中心とする三者関係であった【図１】。ただし、「何もしないケア」は寺院において不可侵の原理原則になっているわけではなく、人びとは仏陀の意向に添うと判断する限り、仏教の教えを読み替えて「何もしないケア」に反するケアさえも「もうひとつの看取り」として受け入れ、実践していた。



【図１】ケアの三者関係

第 3 節では、仏教を使いこなす方略について述べた。寺院の人びとは仏教の教えに対して従属的なわけではなく、仏教の教えを創造的に語り直し、住職や僧侶を道具化して使いこなしていた。主体的に仏教の権威を取り込むことで、みずからが望む生と死を引き寄せようとしていた。この方略は、日常のケアのなか

にも反映されていた。寺院では窃盗とみなされうる行為さえも仏教の教えやケアの文脈のなかで善行として解釈されうるのである。

第4章 「赦し」の技法

本章の第1節では、「赦し」が欧米諸国のキリスト教文化圏、医療福祉の心理学的アプローチの枠組みだけではなく、人びとの身体やふるまいに刻まれている実践知として理解されうる可能性を精査した。寺院の仏教看護の核となる「赦し」について考察するために、市井の人びとの暮らしのなかの「赦し」の事例を比較検討した。

第2節では、寺院の暮らしのなかで確認される人びとの生と死への「赦し」についてまとめた。死にゆく療養者は「何もしないケア」が実施されながらも、「忘れたふり」を繰り返し、一切の理不尽を水に流し、「赦し」の関係を生起していた。仏陀という超越者を置くことで、人びとのケアの関係性は、看護者・療養者という役割によって決まるのではなく、実践によって生起されていくことが示された。

第3節は、療養者の微かな表情、目の動き、瞳の輝きなどから笑顔を読み解く意義を明らかにした。寺院では悲惨な死が日常化されていた一方で、人びとの表情は明るく、仏教の教えに救われているようにも見えた。ただ、人びとは仏教の教えに従属しているのではなく、むしろ笑顔からは主体的に仏教の教えを使いこなしている様子が伺えた。笑顔はケアと結びついており、死にゆく者の微笑み、死にゆく者への嘲笑においてもケアの関係性が生起されていた。

第4節では、「冗談関係」に基づくケアの関係性を論じた。寺院では、必ずしもアフリカ部族社会の親族間に限定されない「慣習的な冗談関係」が認められ、笑いによるメタ・コミュニケーションがケアの関係性を構築していた。このメタ・コミュニケーションは人びとの間に「応答」としての贈与関係を成立させ、「慣習的な冗談関係」が人びとの「生きる力」や「死にゆく力」を錬成していた。笑いがつらい過去の忘却を促し、「赦し」を実践させていたからであった。

第5節は、「LGBTの楽園」と称されるタイ社会においても、トランスジェンダー療養者は否定的カルマに言及されがちであり、笑いによって他者と関係性を築くことが生存のための戦術であった。寺院の歌謡ショーは療養者が社会との接点をつくりだしていくための仕掛けであり、笑いは否定的なカルマに抗い、生の可能性を拓き、「赦し」の関係性を築いていくために不可欠な要素であった。

第5章 生と死への美的表象

本章の第1節では、ひとりの療養者オウが生きた26年間の物語に着目した。その生涯は生きるための闘いであり、同時に「死にゆく力」の錬成がなされていた。オウの生と死はキュビスム的まなざしで捉えられる複数性があった。「複数の生と死」を生き抜いたオウは微笑みを見せながら最期の瞬間まで社会と折りあい、和解することを求めていた。生と死の技法はままならない社会と折りあうための技術であった。

第2節では、寺院のケアを医療・仏教・美意識の三相にわけて分析した。第一相は標準看護の医療、第二相は仏教看護、第三相では人びとが美意識を語り、体現していく。第三相のケアでは、寺院の人びとが情動につき動かされたようにケアを実践していくことが理解された。寺院は、人びとがみずからの生と死への美意識を掘り下げていく「場」であった。

第3節では、メディアによるエイズ表象の功罪に言及しつつ、エイズを社会化していく意義について論じた。エイズは単なる疾患ではなく、「関係性の病い」であることを明らかにし、論理でも道徳でもない、人びとの美意識への理解を深めていくことが、エイズとともに生きること、死にゆくことの理解につながることを示した。

第4節では、仏教そのものが美的表象の対象であり、人びとはみずからの生と死に資するものとして仏教の教えを語り、その語りは具体的なふるまいとともに理解されることを述べた。健康に関する個人の「信念」は身体やふるまいと結びつき、仮定法化されることで語り続けられる。仏教の教えは美的表象されることで、「何もしないケア」に反するケアでさえも、仏陀の意向に添うものとして了解されていく可能性が示された。

終章

本章の第1節において本論文を総括した。生と死の技法は、人びとが寺院というケアの「場」に馴染み、委ねることで、合理的な選択をするという前提から逃れ、「情動のケア」を実践していくための技法であった。情動をわかちあう者は共同作業としての看取りを実施していくのである。

第2節では本研究の限界と展望に言及した。本論文は、エイズケアの実践共同体を対象としたため、伝統的な村落社会の調査とは異なり、歴史の記述分析が困難であった。また、エイズは個人差が大きく比較検証が難しい。今後の学際研究により、これらの課題を克服していく必要がある。

「死にゆく力」の錬成は、本研究の倫理的課題として慎重に論じていく必要があった。自己を論じるオートエスノグラフィーは、死を自己の課題として扱うことで、その打開策となることが期待される。